

人や車の往来激しい八事交差点。江戸時代末期には住む人もまばらな場所だったそう…。そんな尾張名古屋の東の玄関口、飯田街道沿いの地に湯豆腐の「近江屋」という店があった。

湯豆腐の評判は良かったようで、庭には立派な藤棚もあったそう。

明治時代、近江屋五代目の妻(せい)は、主人に先立たれた後、養子を迎えて、実家の姪をその嫁とした。

姪夫婦に商売を任せて、せいは浄瑠璃にはまった。喜樂を分かちたいことが好きな人情家だったようで、店の座敷は多くの人でたいへん賑やかだったそう。

しかし人情語りの浄瑠璃の場が、いつの間にか僧侶を招いて仏法聴聞する場へと変わっていったのだった。仏法聴聞の法座が開かれると、遠近を問わず、浄土真宗の門徒が集まることとなり、遂には別の場所に建物を設けて、法座専用の説教所を運営することになったのだ。

親鸞聖人を慕い、敬い、仏法聴聞に励む浄土真宗の門徒(東・西本願寺、高田派)が合同で設立に尽力した仏法聴聞の説教所は、明治三十三年「石坂会所」として開かれたのだった。

その後、昭和三十七年、代々の篤信の血を受け継いだ治雄(住職の祖父)が初代住職となり、真宗大谷派の許しを得て「即得山 一心寺」と公称することとなった。

毎月十二日に行っている定例法話は、二代目:和丸(住職の父:釋和音)の昭和・平成の時代にも欠かさず勤め、三代目となった今も、一心寺の伝統・いのちとして勤め続けている。

さて、簡単ではありますが、これが一心寺の歴史・沿革です。

日本全国、十数万の寺院があると言われていています。その一ヶ寺一ヶ寺がまったく異なる歴史と背景を持ち地域をはじめ取り巻く環境も、できる活動も存在意義もそれぞれ異なるのが「お寺」という所です。

時代・社会も大きく変わりつつある現在、一心寺はどういう「お寺(本堂)」にしていきたいのか？をずっと考えてきました。

そして「よっしゃ！もういっちょ生きてやろう！」と心の充電ができ、日常へ戻っていく力をいただける本堂にしたいと思い、この度本堂の修繕に着手いたしました。

一心寺はまさに「道場」形式の本堂ですから、立派なお荘厳ありません。そ

れでもなんとか、一人でじっと座っているだけでも「よっしゃ！もういっちょ生きてやろう！」と思える本堂にできないものか…と考え続けていました…。

そこで思い出したのが、『光の切り絵』という作品を創り出している酒井敦美さんでした。

今から七年前、酒井敦美さんの個展を観に行った時でした。私は、時間を忘れて彼女の作品に魅入っていました。心の奥底が暑くなり、感動のあまり目には涙が溢れていました。そして「よし！帰ろう！」と腰を上げて帰ってきたことを思い出したのです。

そうだ！酒井さんにお浄土の花、蓮の絵をご本尊の後ろに描いてもらおう！と思い、すぐに酒井さんに連絡しました。

そして、ご本尊(阿弥陀如来)の台座はどうしようかと考えた時に思い浮かんだのは、以前イベントに来てくださった仏像彫刻師の真野明日人さんでした。

真野さんの作品もまた、ずっと見ていられる奥深さがあり、真野さんの温かい心を感じられる作品であり、見る人の想像力を掻き立てる力を感じたからです。この度、住職のわがままを聞いてくださったお二人のおかげで本堂が完成されたことは、私にとってかけがえのない喜びです。

そして見事なまでに、一人でじっと座っているだけで「よっしゃ！もういっちょ生きてやろう！」と立ち上がって日常に戻っていける力をいただける、心の充電ができるお荘厳になりました。

ご協力くださった皆様に、心より御礼申し上げます。ありがとうございました。いつの世も娑婆を生きる人間の苦楽のことは、仏さまの智慧と慈悲に救われていくほかないのであらうと思います。ぜひとも、新しくなった本堂にお参りください。世界のどこにもないお荘厳、心落ち着く本堂がお待ちしていますよ。

合 掌 釋 健雄